

イデックスオイルレポート ~For a week~

2023/10/6 作成 (株)新出光

【概況】<米長期金利が上昇・米石油在庫の急増>

●米下院は29日、2023会計年度末を翌30日に控え、過半数を占める野党共産党が提案した10月末までのつなぎ予算案を反対多数で否決。予算切れとなれば10月1日から政府機関の一部が閉鎖される。加えて、世界最大の石油輸入国である中国の景気先行きにも不透明感が広がる。経営再建中の不動産開発大手、中国恒大集団は28日、許家印会長が犯罪に関与した疑いで拘束されたことを確認。また、香港証券取引所は同日、恒大の株式取引を停止したと発表した。エネルギー消費大国である米中のマクロ経済への懸念がエネルギー需要減退への警戒感につながり、売りが優勢し相場は90.79ドルへ続落しました。

●2日、米連邦準備制度理事会(FRB)高官らの発言はタカ派寄りの内容。FRBのボウマン理事は、米国のインフレが引き続き高止まりしていると明言し、「追加利上げが必要となる公算が大きいと予想している」との見解を示した。FRBのバー副議長も、どれほど長く十分景気抑制的な水準で政策金利を据え置かかが重要な問題だと強調した。これらの発言を背景に米長期金利が上昇。対ユーロでドル高となり、ドル建てで取引される商品の割高感から原油は売られ相場は88.82ドルへ続落しました。

●3日、前日に今月13日以来の安値まで下落していた反動もあり、この日は買いが先行。また石油輸出国機構加盟国・非加盟の産油国で構成する「OPECプラス」の会合を翌4日に控え、関係者の間では、「OPECプラス」が現行の生産方針を維持する可能性が高いとの見方が強い。原油需給引き締め観測が引き続き根強いことを背景に、相場はプラス圏へ浮上し89.23ドルへ4営業日ぶりに反発しました。

●4日、米エネルギー情報局(EIA)が午前中に発表した9月29日までの1週間の米石油在庫統計によると、ガソリン在庫は650万バレル増と、市場予想(ロイター通信拡大版調査)の20万バレル増を大幅に上回る積み増しとなった。原油は前週比220万バレル減と同予想の50万バレル減を上回る取り崩しとなったものの、ガソリン在庫の急増が弱材料視され、原油売りが活発化。また、WTIの受け渡し拠点である米オクラホマ州クッシング原油貯蔵所の在庫が2210万バレルと8週間ぶりに増加に転じたことも圧迫要因となり、相場は84.22ドルへ急落しました。

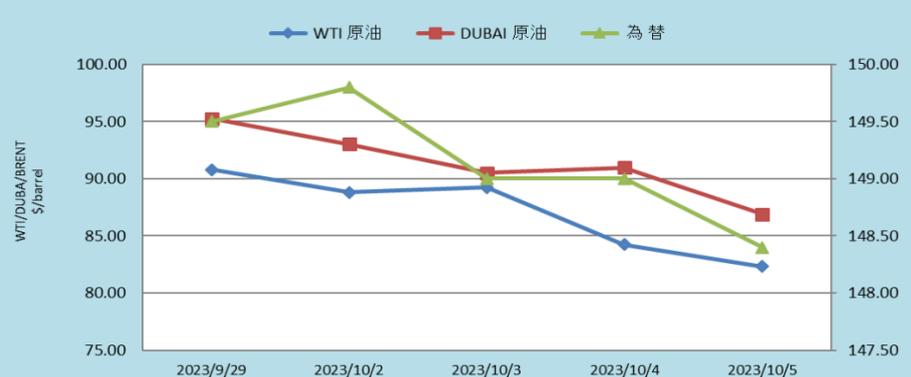
●5日、米エネルギー情報局(EIA)が4日発表した週報(9月29日までの1週間)では、米ガソリン在庫が予想を大幅に上回る積み増しとなり、燃料需給の逼迫(ひっばく)懸念が後退。米民間サービス雇用会社ADPの全米雇用報告や米サプライ管理協会(ISM)のサービス業購買担当者景況指数(PMI)も低調な結果となった。景気減速懸念やエネルギー需要の先行き不安が広がり相場は82.31ドルへ続落しました。

10月6日 16:00現在 WTI原油 82.48ドル 為替 1ドル 149.75円

国内石油製品在庫 9月30日時点 単位万KL



ドル/bbl WTI・DUBAI / 為替 相関グラフ 単位 円



次回元売変動予測

	10/12~	元売変動予測
ガソリン	→	-3.2~-3.7
灯油	→	-3.2~-3.7
軽油	→	-3.2~-3.7
A重油	→	-3.2~-3.7
LSA	→	-3.2~-3.7

【製品卸価格】

《今週》今週の元売り仕切り改定は、3社ともに原油コストは「+1.5円」、補助金は、「-37.6円・60%」、都合「▲4.0円」の値上げ改定となりました。資源エネルギー庁の公表する全国レギュラーガソリンの2日時点の小売価格平均は179.3円となっております。

《10月7日以降》次回の元売り改定は、原油コストは「▲6.5円~▲7.0円」、激変緩和補助金は「-34.3円・60%」の見込みで、都合「▲3.2~▲3.7円」の改定の予測となっております。

※原油コスト「-6.5~-7.0円」
 ※激変緩和補助金「-34.3円」前週比+3.3円
 ※現時点での予測です。

【次世代エネルギー】<脱炭素社会導くマイナス253度>

今回取り上げるのは「マイナス253度」。地球の将来を語る上で避けて通れない数字。石炭・石油・天然ガスを代替し、カーボンニュートラル社会への貢献を期待される水素。この水素が気体から液体に変わる温度がマイナス253度である。これより低い温度は存在しないとされる「絶対零度」のマイナス273度、液化ヘリウムの269度に迫る低温。

水素は燃やしても温暖化ガスの二酸化炭素(CO2)を出さず、水蒸気になるクリーンエネルギー。火力発電や自動車、鉄道の燃料、製鉄原料など用途は多彩だが、気体のままではかさばる。効率的輸送には体積を800分の1に減らす液化工程が不可欠となる。

岩谷産業の創業者、岩谷直治氏は「水素の時代が来る」と唱え続け、1958年に子会社の大阪水素工業(現岩谷瓦斯)を設立。75年には液化水素の製造装置が完成した。日本の宇宙ロケットが使う液化水素は全量を岩谷グループが供給している。水素の液化は大量の電気を消費するが、液化天然ガス(LNG)の冷熱で液化窒素を作り、さらに液化窒素の冷熱で液化水素を作れば電気代が安くなる。2004年に関電などと共同出資でLNG冷熱利用の新会社「ハイドロエッジ」(堺市)を発足させた。マイナス162度のLNGと電気の合わせ技で空気から分離した窒素と酸素、アルゴンを液化。次に天然ガスを改質して高純度の水素を取り出し、マイナス196度の液化窒素と電気でも水素を液化する。現在は1日に15トンの液化水素と、それ以外に液化窒素、液化酸素、液化アルゴンを製造している。

[出典] 日経電子版: <https://www.nikkei.com/article/DGXZQOGH182540Y3A910C2000000/>